

歴史の中の経済学

経済学

ONOMISTS

一つの評伝集

● 福岡正夫

創文社刊

歴史のなかの経済学

一つの評伝集

福岡正夫著



創文社

福岡 正夫 (ふくおか・まさお)

1924年東京に生まれる。1947年、慶應義塾大学経済学部卒業、慶應義塾大学経済学部教授を経て関東学院大学経済学部教授。慶應義塾大学名誉教授。
〔著書〕『一般均衡理論』1979、『均衡理論の研究』1985、『貨幣と均衡』1992、『経済学と私』1994。
(以上、創文社)『ゼミナール経済学入門』1986 (日本経済新聞社)、『ケインズ』1997 (東洋経済新報社)。

〔歴史のなかの経済学〕

著者との申し合せにより検印省略

藤原印刷・鈴木製本

発行所 株式会社 創文社		一九九九年六月二五日 第一刷印刷 一九九九年六月三〇日 第一刷発行	
〒100-0022 東京都千代田区麹町二一六―七 電話〇三―三三六三―七一〇一 振替〇〇二二〇〇―九二四七二		著者 福岡正夫	発行者 久保井浩俊
		印刷者 藤原豊	

ISBN4-423-85098-2

Printed in Japan

まえがき

何人かの経済学者の生誕または死去、場合によっては主著公刊、の一〇〇周年記念や二〇〇周年記念の節目ごとに、私はこれまで求められて何篇かの評伝論文を書く機会を持った。このたび上梓の運びとなった本書は、主としてそれらを収録することで成った一つの評伝集であり、内容の出来映えはともかく、形の上ではケインズの『人物評伝』、シュンペーターの『十大経済学者』などと軌を一にするものである。

ここでまず『歴史のなかの……』という書名についていささか注釈しておくとするれば、それは扱われた経済学者たちがその創造過程で社会や文化の歴史から、どのような影響を受けたかというよりも、むしろ彼らがみずからの創造物をつくり出してそれらの歴史に、どのような影響を与えたかという意味合いのほうを強く含んでいる。というのも、思想家や科学者が周囲の社会情勢や精神的・文化的雰囲気から影響を受けるのは自明のことであり、それは同時代、同一環境に生きるすべての人間にとって共通するところであるが、一方それらの影響の下で時代を超えた不滅の創造物をつくり出す所業は、選ばれた少数の真に偉大な人物のみのなしうるところだからである。本書が主としてかわるのは、彼らが成就したそのような非凡な業績の歴史である。

所収の論文は、冒頭にも述べたようにそのほとんどがそれぞれの節目に依頼を受けて記されたものであるから、本書全体の構成なканずく取り上げられた経済学者の選択にあらかじめマスター・プランがあつたわけではない。一応全篇を三パートに区分はしたものの、これはあくまで便宜上の後知恵であり、たとえばシュンペーターのよう

に多少ともおさまりの悪い場所をあてがわれている場合もある。

対象とされた読者層についてもまた同様であつて、元来学生諸君のための講演の記録にもとづいたものもあれば、最初から専門家に読まれることを意識して書かれたものもある。もう少し具体的に言えば、おそらくマルクスに関する文章などは一般の人々にもわかりかし面白く読まれるであろうし、他方ジェヴォンズの通常注目されることの少ない次元の理論や、エッジワースのハルサーニ・ヴィックリー流の新功利主義の理論、またライフ・サイクル仮説に立脚したマーシャルの産業モデルのマルコフ過程による定式化などの部分は、とりわけ同僚の経済学者諸氏に読んでもらいたいと願つて筆を執つた箇所である。

いずれにせよ収録した諸論稿は、それぞれ主人公たちの天与の才能がいかにかに史上燦然と輝く卓越した貢献をもたらしたかを明らかにしようとしている点で共通しているということができよう。著者としては、本書が通読されることによつて、それがスミスからケインズにいたる学説史の手引書としても、いくばくかの役に立つことを切に念願する次第である。

これらの論文を執筆するにあたって、著者は当然のことながらきわめて多くの参考文献に負うている。その著者名や論文名ならびにそこからの引用頁などを記したかずかずの注は、体裁上すべて章ごとに一括して、各章末に掲げる方針をとつた。またもとの論稿を書いてから今日にいたるまでに新しく出現した関連諸論文、そしてそれらに関する私見などについては、補注として原注のあとに付記することにした。

収録論文は、後掲の「初出一覧」にあるように、二篇を除いてすべて慶應義塾経済学会の機関誌『三田学会雑誌』に掲載されたものである。今般それらを書物の形で出版することを快諾された同学会の御好意に対しては、ここで深甚の謝意を表させていただきたい。

また創文社の小山光夫氏には、文字どおり作業の始まりから終りまで、万般にわたって絶大なお世話になった。同氏のお勧めやご尽力がなかったなら、本書が世に現れることはなかったはずである。いつもながらのご厚情に対して、心からお礼を申し述べておきたい。

一九九九年三月

福岡 正夫

目次

まえがき	v
------	---

I 古典派の二人の巨人

アダム・スミス没後二〇〇年	一
カール・マルクス	三五

II 近代経済学の創始者たち

ウィリアム・スタンレー・ジェヴォンズ	六
レオン・ワルラス	一九
フランシス・イシドロ・エッジワース	一八
ヨーゼフ・アロイス・シュンペーター	三七

III ケンブリッジ群像

マーシャル『経済学原理』再訪	二八三
ピグウ教授没後四〇年	三二五
ジョン・メイナード・ケインズ	三三七
哲学者ケインズ	四一九
経済学者フランク・ラムゼー	四四三
初出一覧	四七七
索引	一〇七

歴史のなかの経済学

——一つの評伝集——

I
古典派の二人の巨人

アダム・スミス没後二〇〇年^①

1 アダム・スミス、あらゆる経済学者のなかでもっともよく知られたこの人物、またあらゆる経済書、否あらゆる科学書のなかでもっとも成功した書物の一つを書いたこの人物は、今「一九九〇年」から二〇〇年前、一七九〇年の七月十七日に世を去った。

彼の終焉の模様については、いくつかのエピソードが伝えられている。死の一週間前になって、彼は友人のジョーゼフ・ブラックとジェイムズ・ハットンの二人を呼び、自分の論文を、完成していて刊行に値すると考えられる二、三のものを除いて全部焼き棄てさせた。その日は日曜日であつたらしいが、恒例のごとくに友人たちが夕食にやってくる、懸案を整理して心安ら became なつたスミスは彼らを迎えて平常の陽気さを幾分とり戻しており、やがて客と別れて寝室に赴くさいに、「つぎの会合はどこかほかの場所に移さなければならぬ」と語つたという。スミスが伝えようとしていたこの別離の慰藉——死は永遠の別離ではない、会合の席を移すだけだという——は、キリスト教的信仰への彼の態度がいかなるものであつたにせよ、死後の状態と万物をみそなわす神とに対する彼の自然宗教への信仰をいきいきと描き出すものであり、彼がそのような教義に十分な信仰を抱いて生きたこと、そしてそのような信仰の下に死んだことを証拠立てるものである。

この事実からも窺えるように、スミスはシャフツベリーやハッチソンに典型を見出す自然的理神論の完全な使徒

であつた。すなわち彼においては、その著作のなかに Nature とも Providence とも記される造物主の行為それ自体が認められており、人間の本性はそうした仁慈深い全知な創造者の意図を実現するために巧妙に考案された装置であるとみなされている。そうしたスミスの自然神学は、周知のように、他人の自然的權利を侵害しないという意味での正義ないしは抑制が守られるかぎりにおいて、各人の何ら權威筋からの干渉を受けない本能の追求が結局は社会の目的に叶うという自由主義を導くが、それはまた個々人の自由交渉は混沌をもたらずののではなくて、論理的に決定される秩序ある様式を生み出すという分析的命題をも含意するものであつた。

スミスにおいては、これら自然神学的形而上学と分析的理論の構築とが分かち難く混合されており、どこに両者の境界線があるかが往々にしてかならずしも明確ではない。これは哲学と科学とがしばしば同じような意味に用いられ、あらゆる科学的理論を（ニュートンの力学体系をさえ）真理の発見とみるよりもむしろ想像力の所産とみる彼の科学観と整合的であるが、今日の見地からすれば、彼の業績の恒久的意義を分明にする上でかならずしも都合であるとはいえない。以下の考察では、とりわけこの点に留意しつつ、自然神学と經世家（スエーデン）のための処方箋と分析的原理の混淆物のなかから努めて分析の側面を切り出すことに意を用い、科学的経済学ないしは現代の理論経済学に対する彼の主要な貢献と思われるものを明らかにすることに専念してみたい。

2 スミスは経済学がほんのその一部にすぎないようなきわめて広範な領域——法学、文学、美学、修辭学、詩、言語、芸術、舞踏、天文学・古代物理学・古代論理学の歴史などをも含む——について書いた。これらに關して現代の読者が目を通すことのできる作品はすべてききに注記した全集グラスゴー版に収められているが、もちろん本稿でその全貌にわたって包括的概観を与えるわけにはいかない。前節で述べた目的からして、当面の考察の対象に

なるのは、いずれも彼の存命中に出版された『道徳感情論』と『国富論』の二著であり、しかもその内容の、分析に限定された側面にすぎない。

『道徳感情論』はスミスが最初の大きな成功をかちえた書物であつて、エディンバラ大学での講義の資料に始まり、グラスゴー大学の講義担当の初半のころに成熟をみたものである。この書は題名の示すように道徳的感情の生起と道徳原理の成立の説明を意図しており、経済学には直接に関係していないかに思われるが、実はそうではない。のちの『国富論』が自利心追求の有効性を力説しているところから、自由放任を礼賛した本であるとか、倫理の重要性に不十分な注目しか払っていないとかかならずしも妥当ではない批判があり、それらに耳を傾けないためにも本書の内容をあらかじめしっかり把握しておくことが必要となるのである。

この書物において、スミスは人間が一般に彼の仲間である他人の行動を是認したり非難したり、要するに道徳上評価する性質をもつという基本的な仮説から出発した。⁽³⁾それが人間の本性であるからには、各人は同時に他人もまた自分の行動をそのような目で評価しているという事実を自覚して行動するのでなくてはならない。そこでその結果として、われわれは誰しも、自分の行動を他人の立場に身をおいて見る能力を習得するのであつて、他人がそれに同情するかしないかを感知するに依じて、われわれ自身の行動の適不適を判断する習性を身につけるにいたる。つまりわれわれは、他人の意見を一つの鏡に見立てて、自分がそこに写される自分自身の行動の観察者であるかのように振舞うのである。

このようなスミスの認識は、人が自分の行為の「内なるモニター」として「公平なる観察者」(“impartial spectator”)を胸裡に抱き、その視座から評価して己れの行為を調整するというに等しい。それがいわゆる「共感」(“sympathy”)の原理であり、スミスはこの原理にもとづいて道徳の一般ルールの成立を、各自の判断が互いに

相寄っていく結果として基礎づけようとしたのである。

いうまでもなく、このようなスミスの目論見が奏功するためには、めいめいの胸裡の「公平なる観察者」が究極には共通のものにオーバーラップすること、つまり当該の学習過程が一種の Moral Equilibrium（道德的均衡）⁽⁴⁾ に収束すること、が必要であらう。この点についてのスミスの所説はいささか樂觀的であり、⁽⁵⁾のちにレスリー・ステイブンは辛辣に評したように、多分に「自己満足的な楽天主義」を含んでいることは否定できない。しかし、その意味で彼の所論が道德原理を究極に基礎づけるには不十分であるとしても、少なくとも「人は他人をつうじて己れの行為を見る」というヒューマン・ネイチャーに関する基本的仮説から、道德感情が習慣的に生起する過程を定式化したことは、それなりに偉とするに足りる所業であるといえることができる。スミスの思想には、確かに神がそのような習性を人間本性に植えたという理神論的背景が潜んでいるが、それはかならずしもいま述べた理論の本質的部分ではない。その形而上学的な起源には遡らず、上記の本性をあるがままの始発的与件として受け取るかぎり、彼の所論はわれわれの道德的感覚が何を是認または否認するかの日常経験にもとづいて構成されていると解することができる。それは功利主義学説や社会契約説ともまた違った独自のアプローチと称してよいものである。

本書に見出されるもう一つの重要性は、さきにも触れたように、それが『国富論』にいたって明確に提唱されることになる経済的自由主義への正しい理解の鍵を与えることである。本書では上述のごとく「共感」^{レインバウ}の原理が説かれ、『国富論』では「自利心」^{セラ・インテレスト}の重要性が説かれるところから、しばしばこの二つの書物は相互に矛盾しているとか、あるいはその間でスミスが変説したとか指摘されることがあった。しかし、そのような批判は、スミスの自由主義を手放しの自由放任主義と同一視することから生じる誤解であって、当を失している。実は先述

の道德原理は『国富論』のなかでも依然として基盤とされているのであって、それにもとづいて共通の善と判断される帰結が自利心の発動により効率的に達成されると考えられるかぎりにおいて、自利心の発動が望ましいとされているにすぎない。換言すれば、スミスがつぎの著作で世に与えたもつとも偉大な貢献は、社会的善が各人の本能を当局からの干渉なしに追求させることによって、かえって有効に実現されることがありうるという真実を、卓越した洞察力をもって明示した点になる。したがって、また反面他人の自然的権利を不当に侵害するような自由は正義の名の下に抑制するべきであるとしたのであって、彼が重商主義や独占を痛烈に批判するのも、そう解してはじめて矛盾のない理解が可能となる。

要するにスミスは、しばしば誤解されるように、無制限の自由放任を唱えたわけではなく、特定の明確な道德的基準の下で「自然の秩序」を達成するための望ましい手段として自利の動機や自由競争の働きに訴えているのである。したがって政府の活動についても、「自然の秩序」に合致し、その実現維持のために必要とされるものとそうではないものとを周到に区別し、後者のような干渉のみを無用のものとして退けたのである。

3 ここで翻って『国富論』そのものの考察に移ることにしよう。この書が公約されたのは、前著『道德感情論』の最終パラグラフにおいてであったが、実際にそれが執筆され始めたのは、スミスが若いバックル公爵の家庭教師として、彼に随行してフランス旅行に赴いている途次、より精確にいえば一七六四年三月以降のトゥールーズ滞在中であった。同年七月五日付のヒュームあて書簡のなかで、スミスは「暇つぶしのために本を書き始めました。小生がほとんど何もすることがないということが、これでお分かりでしょう」と報じているが、これが彼自身による執筆開始への最初の言及である。結局われわれは、『国富論』を生み出したその後のスミスの余暇や経済